



新潟市潟環境研究所所長 大熊 孝からのメッセージ

当研究所では、越後平野の潟と人との共生について、分野横断的に「潟」を読み解く本『みんなの潟学—越後平野における新たな地域学』を刊行しました。執筆は調査・研究に携わってきた研究員を中心とし、多様な視点からふるさとの潟の姿を明らかにした一冊となっています。潟に接することがなかった人にも理解してもらえるよう、巻頭にはさまざまな写真で潟を紹介し、本文ではわかりやすい表現や資料を用いることを心掛けました。

「潟」の存在は新潟市という都市の「個性」です。潟は本市の宝であり、いまなお全国に誇れる地域特有の文化を創造し続けています。この本を座右におき、この知見を次世代に繋げてほしいと願っています。さあ、みんなで「潟学」を始めましょう！

『みんなの潟学—越後平野における新たな地域学』（A5版 144頁）新潟市潟環境研究所編

2018年11月 初版第1刷発行 ISBN 978-4-9910471-0-7 この本は非売品です。市内の図書館で貸し出しが可能です。

『みんなの潟学』書評

中静 透／総合地球環境学研究所特任教授・プログラムディレクター

新潟って、どんなところ？米どころ？みなとまち？水の都？…。そうした新潟のイメージを繋ぐ重要なキーワードが「潟」である。この本では、かつてこの地がいかに潟の多い場所であったのか、その理由を越後平野の成り立ちから掘り起こし、豊かな恵みとともに様々な試練ももたらした潟環境を人間がどう利用し変えてきたのか、その歴史の尊さと反省を踏まえて、潟という地域の宝を活かした「最先端」の都市のかたちを提案している。

信濃川と阿賀野川という大河がともに注ぐ越後平野には、水はげが悪く酸素の欠乏しやすい土壌をもつ低湿地が広がっていた。しかも、時には洪水が起こり、大きな被害をもたらしていたが、洪水の水や土砂は、流れの速い本流には溜まらず、潟をはじめとする低湿地がそれを受け止めていた。それによって、新潟は天然の良港としての条件を与えられた。

越後の先人たちは、そうした低湿地をコメ作りに適した環境に変えると同時に、洪水の危険を回避するために、数多くの放水路を作った。それは、「水との闘い」であり、結果として肥沃な米産地を勝ち取り、洪水の危険性は大きく低下した。川の流れは細く弱くなり市街地が広がった一方で、港では浚渫が必要となった。これまで私たちは、こうした闘いに勝った歴史を、科学技術の発展として誇らしく思い続けてきた。

しかし、こうした歴史によって潟はどんどん減ってゆき、あふれるほど獲れていたドジョウやウナギが減り、特有の生き物たちもつぎつぎに絶滅し、潟のめぐみを次々に失ってきた。洪水を防ぐためにも、無粋で大きな構造物を作ることばかりが進み、長く苦しい川との付き合いの中で培われてきた「賢い」防災技術がすたれてきた。湿地が本来もつ水質を浄化する機能は弱くなって、街中を流れる水路の水は汚れた。私たちの生活は水辺から遠のいて、

独特の利用のしかたや文化も失われつつある。子どもたちにとって川は危険な場所となり、水辺を楽しむことも難しくなった。それらの変化は近代化ともいえるかもしれないが、新潟の産業や文化の魅力と特徴を薄れさせ、さらには生活の豊かさや快適さを失うことにつながっている。この本は、私たちがほんとうはこのことに気づき始めていること、そして新しい方向性に歩みだすべきであることを、わかりやすく教えてくれている。

最近、潟をはじめとする沿岸域の生態系がもつ機能の再評価は世界的にも進みつつある。今や、沿岸域の生態系がもたらす恵みや働き（生態系サービス）を経済価値評価すると、おなじ面積の熱帯雨林よりはるかに大きいことがわかってきた。ラムサール条約（湿地の保全に関する国際条約で、佐潟も指定を受けている）でも、個々の湿地だけではなく、それを含んだ都市に関しても認証が始まると聞く。16もの潟を有する新潟市は、この指定を最初に受けるにふさわしい都市だと言えるだろう。いうならば、「新」しいコンセプトで「潟」を考え始めた最先端の都市「新潟」を世界が見つめているのである。

この本は、人間の営みと沿岸域の生態系の深いかかわりを知りその将来を考えることによって、都市と自然の在り方を探るために必読の一冊である。



中静 透（なかしずか とおる）1956年、長岡市生まれ。専門は森林生態学、生物多様性科学。千葉大学卒。理学博士。

森林総合研究所、国際農林水産業研究センター、京都大学教授、総合地球環境学研究所教授、東北大学教授を経て、総合地球環境学研究所特任教授（現職）。国際生物多様性研究計画科学委員、国際森林研究機関連合理事、日本生態学会会長などを歴任。著書に「モンスーンアジアの生物多様性」（岩波書店、共著）、「森のスケッチ（東海大学出版会）」など。日本林学会賞、松下幸之助 花の万博記念賞（団体受賞）、第1回みどりの学術賞、日本生態学会賞を受賞。

口絵

- ・ 潟に集う・潟に触れる
- ・ 潟に漕ぎ出そう！
- ・ 潟の恵みいろいろ
- ・ 四季のうつろい
- ・ 越後平野の生きもの
- ・ 越後平野の変遷
- ・ 明治後期の越後平野
- ・ にいがたの「潟」

I 越後平野の大地—成り立ちと開発

- 1 越後平野の生い立ち①
—川を引き寄せた地殻変動— …… 澤口晋一
- 2 越後平野の生い立ち②
—平野をつくった海面変化—
- 3 越後平野にはなぜ潟や池が多いのか
- 4 じゅんさい池、佐潟、御手洗潟の生い立ち
- 5 越後平野の自然的特徴と開発の発端
—大地の中の水を動かす— …… 大熊 孝
- 6 越後平野で最初に開削された松ヶ崎堀割
- 7 大河津分水と萬代橋
—越後平野の乾田化と新潟市の都市計画—
- 8 全国でも珍しい川と川の立体交差
—江戸時代の先端的放水路工事—
- 9 開発と伝承①
—馬堀の首祭りで見帯の首塚— …… 高橋郁丸
- 10 開発と伝承②
—鎌倉潟の大蛇・岩屋の七面大蛇—
- 11 開発と伝承③
—曾根のお仙地蔵と中野小屋のおさき地蔵—
- 潟のたね① 潟や川の名残をたどってみよう！
- 潟のたね② 二つに分かれた潟 鏡潟

II 生きものを育む潟

- 12 潟の生物多様性の価値
—エコトーンと生態系サービス— …… 井上信夫
- 13 ちょっと変？水辺の植物の生き様 …… 志賀 隆
- 14 新潟の水辺の植物—失われる水辺の植物たち—
- 15 北限のオニバス
- 16 小さい潟や水路に息づく多様な植物
- 17 外来水草の脅威
- 18 移り変わる潟の魚たち
—多様性が失われる魚類相— …… 井上信夫
- 19 姿を消した春告げ魚…ニホンイトヨ
- 20 繁栄する外来魚・衰退する外来魚

- 21 激変するカメ類の世界
- 22 海と川を巡る壮大な旅…サケ
- 23 海と川と潟を行き来する海産魚介類
- 24 ヨシと鳥たち …… 小林博隆
- 25 ハクチョウが新潟にやってくる理由 …… 佐藤安男

●潟のたね③ 水辺の植物を調べてみよう！
(道具編) (標本作成編)

●潟のたね④
マークオサムシー少し変わった潟の生きもの—

III 文化を育む潟

- 26 潟と共にあった暮らし
—複合的な生業— …… 隅 杏奈
- 27 全国的に有名だった亀田の泥鰌列車 …… 井上信夫
- 28 潟や田んぼで行われた狩猟
- 29 佐潟の名産と暮らし …… 太田和宏
- 30 潟に魅了された文化人
- 31 むかし 潟は子どもたちの遊び場だった …… 井上信夫
- 32 鮭の伝説 オオスケとコスケ …… 高橋郁丸
- 33 潟の主要水辺に棲むものの伝承 (福島潟)
- 34 新潟市内の河童伝説
- 35 河童が福島潟に住んでいる？ …… 大熊 孝
- 潟のたね⑤
神社やお寺はパワースポット？潟と社寺
- 潟のたね⑥ 砂丘農業—潟周辺の土地利用—

IV 未来へ向けて 潟と人とのこれから

- 36 日本人の伝統的な自然観とこれから
—山川草木悉有仏性— …… 大熊 孝
- 37 市内唯一のラムサール条約湿地
—地域における佐潟の存在意義— …… 太田和宏
- 38 みんなの潟 身近な自然と関わる …… 隅 杏奈
- 39 田んぼダムとはなにか …… 吉川夏樹
- 40 潟の水質改善と農業
- 41 治水機能保全のための潟の役割と対策
- 42 「土手論」から考える二一世紀の治水対策 …… 大熊 孝
- 43 潟の土の中で眠っている植物のタネ …… 志賀 隆
- 44 かつて残された潟群の保全のあり方 …… 大熊 孝
- 45 ラムサール条約都市構想
—自然と共生する都市へ—



潟にまつわる写真を巻頭カラーの口絵ページで紹介



読み切り2ページを基本として各分野から45タイトルを掲載